

上演 9

2024年8月1日4校目
近畿ブロック

兵庫県立東播工業高等学校

「廻る」

第48回全国高等学校総合文化祭
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

北海道苫小牧東高等学校

弦巻茉優

この作品は、小学生の時に離れてってしまった梶谷と宮川の二人を中心に6年間の人と人とのつながりが描かれている。閉ざされた空間の中の話には特別感があり、普段話さないようなことも話してしまう。観覧車という密室空間で繰り広げられる会話を通して彼らの心情の変化、そして彼らの生き様を垣間見たような気がして、この先も彼らを応援していきたいと思うようになった。

「観覧車から見える建物が昔は小さく見えていたのに、いつの間にか大きくなっている気がする。」私達講評委員はこの梶谷の話に自分自身を重ねた。小さい頃は何でもできると思っていたが、色々なものを見て新しい考えに触れると、今までの自分がいかにちっぽけで狭い視野を持っていたかを思い知らされる。

登場人物が全員男子だったのに対して、講評委員はほとんどが女子だった。そのため考え方や雰囲気から性別の差が感じられた。女子なら「友達になろう」は簡単に言うことができるが、男子は決心しないと言えない。ということも話題に上がった。

会話の掛け合いのテンポが良く、見ていて心地が良かった。自分にだけ来ない連絡にもやもやすることや、自分の成長に不安を感じる事など、私たちにも当てはまる部分が多く理解しやすかった。また、演出装置の面から見てみると、6年の月日の経過をその時代にあったニュースで表していることが分かる。他にも観覧車という狭い空間の中でこじんまりとさせないような演技が素晴らしかった。

彼らが「観覧車」によって時間や季節、人間関係が繋がり巡って行く。タイトルにもあるように「廻る」は登場人物たちがこれまで積み上げてきた月日とこれからも人生が続くことを暗示しているのではないだろうか。人と人はいろいろなところで繋がっていて、世界は広いようで狭いのだなと改めて気付かされた。劇中で観覧車は解体されるが、きっとフィリピンでも人と人を繋いでいるのだろう。いつかどこかで二人が会ってほしいと思う。

